

テーマ「社会的養護」

～親の離婚や貧困・虐待で家族と暮らせない子ども達がいま～

パート	内容
オープニング	<p>子どもは生まれてくる環境を選ぶことができません。</p> <p>家族と一緒に暮らしたくても暮らせない、親からの愛情を受けられない、当たり前のように感じる家族という繋がりを持たない、そんな子どもたちがいることを知っていますか。</p>
ストーリー ー1	<p>長谷川雄介です。今年、35歳になります。私は、父と母と3人暮らしでした。しかし、父の会社が倒産し、会社の借金から逃れるため、母と一緒に家をでていきました。2～3歳のころでした。母は、生活のために水商売の仕事をしていたので、日中はほとんど寝ていました。私はいつも一人でした。近所のお姉さんと仲良くなりよくお世話になっていました。</p> <p>小学校に入ったものの先生に叱られたことがきっかけで学校が怖くなり、学校にはいなくなりました。それからは学校へ行かず、母のお金をくすねては近所のゲームセンターで遊んだり、おもちゃを盗んだりしていました。あるとき、友達と空き巣をやって警察に捕まり、留置所に入れられました。これをきっかけに悪いことはやらなくなりました。</p> <p>しかし、母はそんな私に途方にくれ児童相談所に相談したらしく、一時保護所という施設に入れられました。その後、2ヶ月ほどして、母親が迎えにきてくれました。一緒に家に帰るのかと思いましたが、そのまま児童養護施設に連れて行かれ、その日から施設で暮らすようになりました。</p> <p>施設では、上級生に嫌がらせをされたり、物が盗まれるのは日常茶飯事。辛いこともたくさんありました。施設ではお小遣いをもらっていましたが、ゲームセンターでの遊びにお金をつぎ込んで小遣いだけでは足りなくなった私は、賽銭泥棒をしてしまいました。そのことがばれて叱られた時、施設の先生から思いっきりビンタをくらいました。私が「一人がいい、家に帰りたい」といったからです。その先生は、一生懸命私たちの世話をしてくれていたんだと思います。それなのに、私がそのようなことを言ったので、悲しかったのでしょうか。これは本当の愛の鞭でした。心にズシンとききました。私は嬉しくて泣きました。私の周りにはこんなに心配してくれる人がいるんだと思い、嬉しくて泣いたのです。</p>
ストーリー ー2	<p>石川沙織です。18歳です。私は、小学校5年生から今の児童養護施設で暮らしています。</p> <p>母は私が幼いころに早くに亡くなり、父親と暮らしていましたが、父親の長期入院のため、施設で暮らすようになりました。</p> <p>幸い、この春、高校卒業とともに飲食会社に就職することが決まっています。本当は、高校の友達のように大学に行って学びたいと思っていました。でも、アルバイトで学費と生活費を自</p>

	<p>分で稼ぎながら大学に通うことは難しいと思い、進学をあきらめました。</p> <p>春には施設を出なくてははいけません。退所した後のアパート探しや生活に必要なものを準備しないとはいけません。でも、初めての一人暮らしで、何が必要なのか、どんなことを準備しないとはいけないのか、本当に一人で生活していけるかどうか、とても不安です。</p>
<p>社会の現状の説明</p>	<p>「社会的養護」ということばを聞いたことはありますか。何らかの理由で子どもを家庭で育てられない場合に、国や地方公共団体が養育する仕組みを「社会的養護」といいます。いま、社会的養護を必要とする子どもの数は、日本全国で 45,000 人に上ります。</p> <p>社会的養護には、児童養護施設や里親制度などいくつかの種類があります。その中でも最も多くの子どもたちが暮らしているのが「児童養護施設」です。今、「児童養護施設」は全国に約 600 ヶ所あり、そこで約 3 万人の子どもたちが暮らしています。</p> <p>子どもたちが児童養護施設で暮らすことになった理由は、虐待や育児の放任、両親の精神疾患、経済的な理由などにより子どもが育てられなくなるなどです。しかし、両親を責めるだけでは問題解決にはならず、これらの背景には、失業や貧困など社会全体の問題が根深く存在しているということも忘れてはなりません。</p> <p>このような社会的養護を取り巻く課題の一つに、施設を退所した後の自立という問題があります。児童養護施設は、原則 18 歳になると施設を退所なくてははいけません。そのような退所後の子どもたちの自立支援を行なっている NPO があります。</p>
<p>課題に取り組む NPO の紹介</p>	<p>NPO 法人ブリッジフォースマイルの植村百合香です。</p> <p>私達は、子ども達がどんな環境で生まれ育っても、自ら未来を切り開くことのできる社会の実現を目指し、児童養護施設を巣立った子どもたちの自立支援を行っております。</p> <p>児童養護施設からの退所を控えた高校生 3 年生には「巣立ちプロジェクト」を、退所した若者たちにはボランティアの大人との繋がりで支える「アトモプロジェクト」、中学生には将来の働くイメージを持ってもらうため、企業と連携で行う「ジョブプラクティス」といったプログラムを実施しています。</p> <p>児童養護施設で暮らす子どものうち、高校卒業後に、大学や専門学校に進学する子どもは、約 20%。これは、全国平均の 70% に比べ 1/3 にも満たない割合です。大学等に進学するためには、生活費や学費を自分ひとりで稼がなければならないという経済的な理由が大きな壁となっています。</p> <p>また、ブリッジフォースマイルが行った調査では、せっかく進学や就職をしても早いうちにやめてしまう、退学してしまう子どもが多いことがわかりました。転職率は、1 年目で約 10%。3 年目では正規社員が 30%、非正規社員の場合には約 70% 近くが転職をしています。さまざまな理由が考えられますが、コミュニケーション能力の問題からの対人関係でのつまづき、施設と社会の厳しさのギャップに耐えられないことが比較的多く挙げられます。</p>

	<p>また、専門学校や4年制大学に進学した子どものうち、約15%が2年生になる前に退学していることがわかりました。卒業までの中退率は3割から4割となり、全国平均の1割より大幅に上回っています。</p> <p>勉強とアルバイトの両立のなかで体調を崩してしまい、単位を落とし、意欲をなくし、中退してしまう子が少なくありません。</p> <p>就職者、進学者のどちらにも言えることですが、施設を出てからの公的支援は殆どなく、退所後の継続的なサポートが十分になされていない現状があります。</p> <p>児童養護施設で暮らす子どもたちの多くは、必要な親からの愛情を受けずに育ち、家族という繋がりが無い中で生活をしています。そのため自分を認められない気持ちが強く、未来に希望が見いだせない子どもも中にはいます。</p> <p>ブリッジフォースマイルの活動に携わるスタッフやボランティアは、必ずしも福祉分野における専門的な知識・経験を持っているわけではありません。いわゆる「普通の大人」との繋がりに重きをおいています。社会は、施設に居た時とは違い、社会的養護の専門家ばかりではありません。様々な考え方、背景を持つ大人と知り合い、信頼関係を築くことで子どもたちの自信に繋がりたいと考えています。</p> <p>「カナエール」という児童養護施設の子どもたちのためのスピーチコンテストでは、スピーチをする1人の子どもに対し、3人のボランティアがチームとなり、励まし合いながら支えます。</p> <p>普通の大人が自分の経験を活かして若者を支えることで、家族だけでない新しい繋がりを生み出し、子どもたちに夢や希望をもってもらい、そして叶えてもらいたい、そんな思いで活動しています。</p>
<p>プロジェクトに参加したプロボノワーカーの声</p>	<p>2011年にブリッジフォースマイルのウェブサイトプロジェクトに参加したプロボノワーカーからのメッセージです。私が、このプロジェクトに携わる前には児童養護施設については、触れたことのない世界で、“キャンディ・キャンディ”のような孤児院や鑑別所のようなイメージを持っていました。</p> <p>ブリッジフォースマイルが作成している一人暮らしのためのガイドブック。このガイドブックには、食事のことや生活必需品のことなど、生活のごく基礎的な内容が書かれていました。生活の常識と言われるようなことを知らない状態で一人暮らしをしなくてはいけない子どもたちがいることに衝撃を受けました。</p> <p>一方で、母親の虐待が多いということを知った時には、自分自身も子どもに手を挙げてしまう可能性もあるということを感じました。</p>

	<p>ブリッジフォースマイルへの支援をきっかけに、様々な社会課題に目を向けるようになりました。物にあふれていた生活を見直したり、自炊を多くするようになったり、自分自身の生活スタイルにも変化がありました。現在は、賛助会員としてブリッジフォースマイルの活動を応援しています。</p>
<p>課題に取り組む NPOの紹介</p>	<p>社会的養護に関する課題に対して、ブリッジフォースマイル以外にも、様々な取り組みを行っている NPO があります。</p> <p>「NPO 法人 3keys」</p> <p>児童養護施設の子どもたちをはじめ、経済的な理由で公教育以外に学習機会が得られない子どもたちに対して、大学生や社会人などを家庭教師や補習教室の学習ボランティアとして、定期的かつ継続的に派遣し学習支援を行っています。</p> <p>児童養護施設の職員だけでは、一人ひとりの子ども勉強のようすを細かくケアすることが難しい中、学習ボランティアが子どもたちに勉強を教えることで、子どもたちの自信や意欲づけといった気持ちの支えにもなっています。</p>
<p>プロジェクトに参加したプロボノワーカーの声</p>	<p>3keys のウェブサイトリニューアルプロジェクトに、アカウントディレクターとして参加しているプロボノワーカーです。児童養護施設で暮らす子どもたちは様々な事情でそこで生活せざるを得ない状況です。経済的に塾に行くことは難しい。学校にしか頼れず、夢があってもそこにたどり着くための選択肢がとてすくない。それが自信、意欲、自立の壁になっています。もちろん一人ひとりが抱えていることは全く違います。</p> <p>3keys では、子どもとの面談、ボランティアとの面談、研修を実施し、その子どもに合った方を学習ボランティアとして派遣しています。代表の森山さんは、学習ボランティアにとっても 3keys が成長の場になるようにしたいと話をされていました。そして、子どもへの学習支援は施設職員の方にとっても助けになっています。関わる方すべてに寄り添って活動されている姿から、森山さんの活動への情熱を感じることができました。ある施設では、3keys の学習ボランティアに教えてもらい勉強ができるようになった子どもをみて、それまで勉強に関心をもっていなかった他の子どもが、自分もやりたい！と言い始めたそうです。</p> <p>学習支援を通して、子どもたちが勉強ができるようになっていくことや、大人を信頼できるようになることは、社会に出て、自立して生きていくために必要な土台になると思います。もしも将来、困難なことに出会ったとしても、それがきっと助けになってくれます。子どもたちが自信をもって育っていくには 3keys のように寄り添って支えてくれる存在が必要なのです。</p>
<p>課題に取り組む NPOの紹介</p>	<p>「NPO 法人社会的養護の当事者参加推進団体 日向ぼっこ」</p> <p>実際に、児童養護施設や里親のもとで生活していたことのある人たちが、施設を出て自立してからも気軽に集える場所として、「日向ぼっこサロン」を運営しています。他にも、社会的養護の当事者の声を集め、出版するなどして社会への発信・啓発活動を行なっています。</p>

2013.2.2 プロボノシエーター2013

プロジェクトに参加したプロボノワーカーの声	<p>日向ぼっこのウェブサイトリニューアルプロジェクトに、情報アーキテクトとして参加しているプロボノワーカーです。私は、児童養護施設や里親制度 というものがあることは、本や漫画などを通して知ってはいました。でも、初めにアカウントディレクターの方から、今回のプロジェクト参加のお誘いをいただいたときには、「社会的養護」とか、「当事者」という言葉がそれらと結びつかず、日向ぼっこの活動についてもイメージがわからず、活動意義がよく分かりませんでした。プロジェクトは いまもまさに進行中なのですが、これまでの中で、特に印象に残ったことが 2 つあります。</p> <p>1 つ目は、代表の渡井さんの著書を読んだことです。普段の穏やかな笑顔からは想像もつかない内容に、とても衝撃を受けました。当事者である子供は、自分は何も悪くないのに、先ほど皆さんが発表されたとおり、負のスパイラルにおちいってしまうことが多いと知って、入所中の子どもはもちろん、退所後の当事者も支える必要があるんだということが、そのときストンとハラに落ちました。</p> <p>2 つ目は、日向ぼっこサロンに遊びに行ったときのことです。サロンでは当事者の子たちが、「自分の施設ではこんなルールだったよ」という話をしていました。そういった、施設経験者でないと出来ない会話を聞いて、やっぱり当事者同士が集まるサロンという場所は、特別な存在なんだな と実感しました。かといって、日向ぼっこは、当事者しか参加できないような閉鎖的な空間ではまったくなく、誰でもウェルカムな、名前のとおり、あったかいところです。日向ぼっこさんには、これからも、サロンだけでなく、当事者の声発信などの活動を続けていただきたいです。また、日向ぼっこのような存在が、全国に広まったらいいなと思っています。</p> <p>最後に、もし社会的養護に少しでも興味を持ってくださって、自分も何かできることをしたい！ という方がいらっしゃいましたら私はまず、渡井さんのこちらの本、「大丈夫、がんばっているんだから」をご購入いただき、周りの人にも広めていただくことを おすすめします！</p>
課題に取り組む NPO の紹介	<p>厚生労働省の方針では、家庭に近い環境で子どもたちを育てられるよう施設の小規模化や里親制度推進を目指しています。</p> <p>また、それぞれの児童養護施設が、周囲の地域との連携を深めながら、子どもたちを育てる取り組みをしているところもあります。つくば市にある「筑波愛児園」では、お祭りやイベントで地域の人と交流したり、地域の飲食店や中小企業で職場体験を行ったり、週末だけ地域住民のご家庭を訪問し、団らんのひとときを過ごすプログラムなどを取り入れ、子どもたちの成長の糧としています。</p>
プロジェクトに参加した	<p>筑波愛児園のプロジェクトで、プロジェクトマネジャーとして参加したプロボノワーカーです。プロジェクトを通して、地域との繋がりを大切にされ、積極的にイベントなどの交流の機会を作っている様子が伝わってきました。園舎の改築後の新しい施設では、離れて暮らしてい</p>

2013.2.2 プロボノシェアター2013

ロボノワーカーの声	<p>た親子が共同生活を試せる場所を準備されていました。こうした全ての取り組みが、子ども達が安心して社会で暮らせるような状況を作りたいという施設職員の皆さんの想いからきているように感じました。</p> <p>筑波愛児園の職員の方から聞いた話の中で、学校に通う事が出来なかった子どもの話が印象に残っています。職員の方と一緒に将来の夢の絵を描き、夢について語る機会を増やした事で、学校に通うようになり、学校生活も楽しめるようになったそうです。その話を聞き、夢を持つ事の大切さを改めて感じるとともに、子どもたちの夢が出来る限り叶えられるような状況を作りたいと思いました。</p> <p>一方で、プロジェクトチームで行ったアンケートでは、子どもに関する問題に関心を持っている人が多いものの、児童養護施設の現状について知っている人はほとんどいないということがわかりました。</p> <p>児童養護施設については国から十分に支援を受けているのではという誤解をしている人もいました。筑波愛児園のように東京都から離れている施設もある事、国からの支援だけでは不足している事が知られていません。児童養護施設の現状を正しく知る機会がもっと社会において必要だと感じた瞬間でした。</p> <p>まずは児童養護施設をとりまく現状を知ってもらいたいと思っています。そして少しでも関心を持ってもらえたらと思います。そこから、支援の輪が広がっていくと思っています。</p>
最後のまとめ	<p>国や地方公共団体が養育する仕組みである「社会的養護」。しかし、子どもに必要なお支えや励まし、繋がりなどは、今の制度だけでは補えません。それぞれの経験を背負いながら生きている子どもたちがいます。そして、その子どもたちを支える児童養護施設で働く職員やその地域の方々、ボランティアやNPOがいるのです。</p>

※冒頭部に出てくるストーリーは、事実に基づいたフィクションです。イベント当日に読み上げていただいた方とは、全く関係はありません。